

バッハノート —— カロフの聖書

飯 島 隆

a. カロフ聖書の科学的実験

1985年、バッハ生誕300年を記念してアメリカのモラヴィアン神学校、旧約学教授、Howard H. Cox (以下コックス)によって、J.S. Bach (以下バッハ)の所有していたアブラハム・カロフ (Abraham Calov 1612~1686)の注解書付聖書全3巻の科学的分析にもとづく報告書“*The Calov Bible of J.S. Bach*”¹が出版された。バッハノート a. はこの1. The Authentication of the Hand-Penned Material in Bachs Calov Bible²の要約と筆者のコメントを加えたものである。

カロフの注解書付聖書全3巻は、バッハ自筆のサインと日付が示すように1733年、ライプツィヒ時代に入手し、1750年、バッハの死後は妻のアンナマグダレーナが所有した。その後この聖書は、ドイツの移住者の手によって19世紀初期にアメリカに移され、1934年に発見された。これはバッハの蔵書のうち今日まで発見された唯一の書物と言われている。

この聖書は1969年頃にはごく少数の学者、限られたグループの音楽家に知られるところとなった。コックスは1970年、ドイツの Christoph Trautmann (トラウトマン)によってカロフ聖書の最初の論文が提出されたことを述べている。この聖書が問題になるのは、この聖書の中にバッハ自筆のサイン、日付のほか、余白へのコメント、アンダーライン、マーク、多くの印が記されているからである。

コックスはトラウトマンの論文出版の意図は次の二つであることを指適している。それは敬虔で熱心なバッハの信仰を証明したかった。トラウトマンはそれを音楽と礼拝を関連づけるバッハの4つのコメント (出エジプト記15.20, 歴代志(上)25.1, 歴代志(上)28.21, 歴代志(下)

5.12~13)からみいだしたのである。もう一つはバッハのカロフ聖書研究の文献を世に知らしめることであった。

礼拝と音楽を関連づけるコメントについてはbで述べることとする。

コックスはトラウトマンの研究について以下のごとく述べている。カロフ聖書の聖句脱字の訂正について、バッハは自筆で+der Gerechte (イザヤ53.11), +jhn (マタイ18.30)と書き加えているがihnと書くべきをjhnと書き、バッハは度々誤って書いていることを指適している。事実、1730年8月23日、ライプツィヒでバッハが市参事会に提出した『整った教会音楽のための簡単なしかし緊急なる覚え書き、ならびに教会音楽の衰退に関する若干の公平なる考察』(*Eingabe an den Rat der Stadt Leipzig*)³の文中にJ=iの混用がみられる。文中のバッハ自筆は、Jedochと書くべきをiedoch, またJedenと書くべきをiedenと書かれている。

トラウトマンはバッハのこのような筆跡によって証明を企だてたのである。しかし、聖書につけられた文中のアンダーライン、NBの区分け、筆跡は妻のアンナマグダレーナを手本とすること、赤、青インク、えんぴつの鑑定を顕微鏡で行ったのである。

コックスはトラウトマンの研究をある点で評価しながらも、正しい根拠をもって説明するには不十分であることから、さらに一歩進んで科学的分析、方法、文学の専門的研究によって行ったのである。

コックスはカロフ聖書に書かれたインクの材質分析をカルフォルニア大学デービス校 (at Davis) クロッカー核実験室 (Crocker Nuclear Laboratory) で行なう方法を選んだ。

この実験にはDirector, カーヒル (Thomas Cahill), インクの分析を行なう重要な働きをし

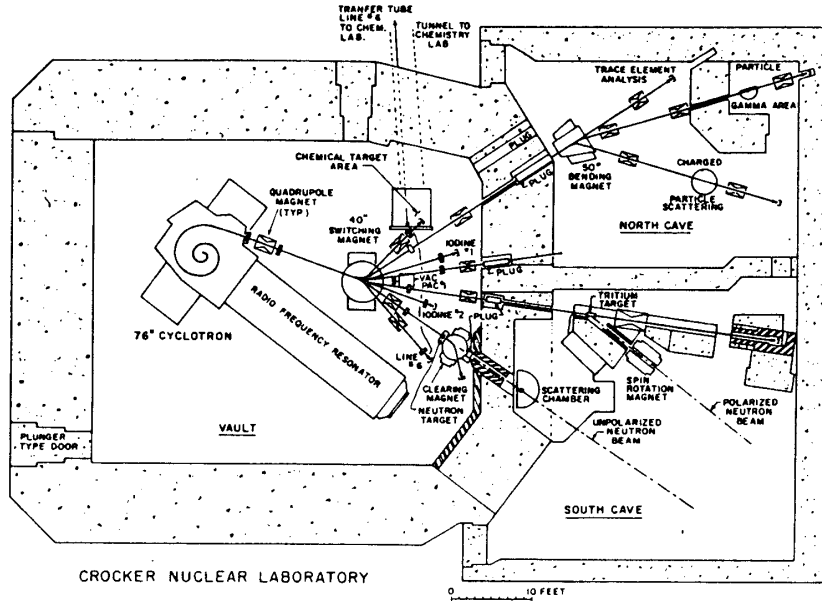


図 1. CROCKER NUCLEAR LABORATORY

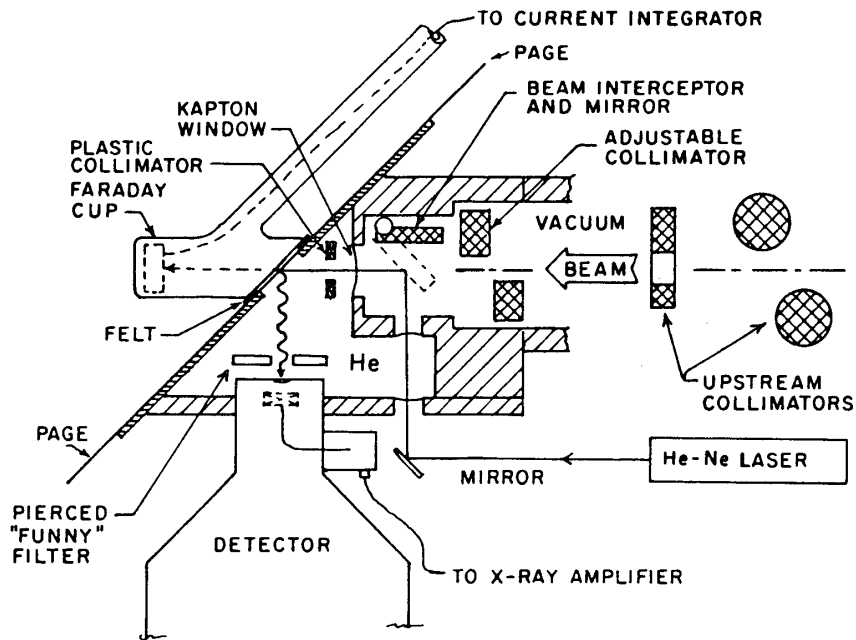


図 2.

た物理学者 Dr. クスコ (Bruce Kusko) 他, 実験に熟練した数名の科学者達が参加した。

この実験には, カロフ聖書を保管しているコンコーディア神学校図書館の Dr. ダニエル氏とそのスタッフ, アートディレクター, ラファイエットカレッジのエリス・フィンガー氏が加わった。またバハ自身が書いたであろう筆跡, 文字の鑑定はバハライプツッヒアルヒーフのシュルツ氏 (H.J. Schulze) など多くの専門分野

の研究者の協力によって行なわれたのである。

まずペンの材料について物理学的分析がクロッカー核実験室で公開された。クロッカー核実験室の建物は各々90 フィート, (およそ 30 m) 80 フィート (およそ 25 m) から成る広さをもつもので, 実験室は三つの室に分かれ, 特にサイクロトンが置かれてある室は 10 フィート (3 m) の厚さのコンクリートで囲まれている。

実験は北側に面する室で行なわれた。実験は

直接 1 mm² のインクの局部に陽子の光線 (nuclei of hydrogen atoms X ray) が、1.2 分放射され、この X 線の出力、元素構造の測定を行ない、分光の時間をコンピューターに送ってデータを算出するというものである。詳しく説明するならば、特別の可動式の読書台にカロフ聖書が置かれ、それはフェルトでおおわれた鉄の平板の上に安置され、読書台は上からさるかんによってつるさされて、90° 時計回りに回されるのである。(図 1. 図 2. 参照)

初めに見本がテストされ、次にインクで書かれた局部にレーザービームによって位置が確認され、その後、プロトンビームが局部に発射されるのである。別室のコントロール室でテストされたデータはコンピューターによって元素の測定結果と量の比較が行なわれる。

この局部に当てられる X 線は、聖書を破壊することのないように行なわれる方法、技術が PIXE (Particle Induced X-ray Emission, 微量 X 線誘導放射) と呼ばれるものである。元来この PIXE と呼ばれる技術は、環境学、生物学、考古学の資料分析を行なう際の最も破壊の少ない方法として使用されたのである。最近では、初期のプリントされた紙、インクの元素構造測定のために使用された。クロッカー実験室で行なわれたものは、15 世紀、18~19 世紀の羊皮紙、プリント本、ディデロの百科辞典、チャーサーの Canterbury 物語初期印刷本それら書物の分析とデータを算出するのに使用されたのである。その意味でカロフ聖書の分析には、このク

ロッカー実験室が最も適するるのである。もちろん現在では放射能によって年代測定する方法が最も信頼のある方法として認められるのである。

コンピューターの答えは代表的な 19 の元素を含んでいることを表示し、元素周期表の終りには軽微な Na (ナトリウム)、Pb (鉛) を含んでいることも示した。また非常に弱い微粒子を放出する C (炭素)、H (水素)、O (酸素) を探知したのである。普通、比重の重い金属元素を確かめることによって地質分析に関するデータを行なうのに有益であると言われている。

さらに Ti (チタニウム)、Ni (ニッケル) のわずかな量、Cl (塩素)、P (燐)、Si (シリコン) も検出された。このほか検出された元素は S (硫黄)、K (カリウム)、Ca (カルシウム)、Mn (マンガン)、Fe (鉄)、Cu (銅)、Zn (亜えん)、これらの元素の性分がインクの分析に役に立つのである。サンプルのほかに外側に余白、上下の余白を分け、合計 153 の項目のプリントされたインクの部分がテストされた。

示されたデータは 10⁻⁹ (nanograms), 10 億分の 1 という極めて小さな量を表わす単位によって標示された。

この元素の測定結果は数学上かなりの近値となる結果となった。量そのものは比較する目的のために使用され、数の領域は 0~28,000、これは一単位 (1 mm²) を示す。

テストされた項目を評価するために、データを基準に合わせるためにコンピューターは鉄の

(amounts in nanograms)

	Mn	Fe	Cu	Zn	Pb
Penned 3 letters	29.8	514.9	55.5	18.4	17.8*
Blot of 3 letters	17.0	235.3	45.0	2.3*	17.8*
Signature (volume 1)	109.9	1015.3	260.0	385.6	20.4*
Date	42.6	408.6	109.0	155.3	20.4*
Signature (volume 2)	143.5	1607.2	348.9	711.1	19.1*
Date	66.3	940.1	160.1	316.9	19.1*
Signature (volume 3)	68.9	859.9	184.4	290.5	24.6*
Date	63.2	1005.6	227.8	374.4	27.3*

* An undetermined amount but less than the figure shown.

図 3.

サンプルの元素を 100 と定めた。次に鉄からその他の元素の割合が算出され、他の項目を比較し、それらを座標にして読むということが行なわれる。

カロフ聖書に書かれたバッハのサインと日付、そして一冊目のタイトルページに書かれた三つの文字のけしあとの比較をしながら一つの推測をたててみる。タイトルページの裏に記入された奇妙な文字、左手片すみに傾斜した三つの文字、chi, alpha, rho (ギリシャ文字にも見えるし、そのようにも見えない。Fac. 3)。またこのページの反対側に明らかに記入された文字の消されたと思える跡がある。コンピューターはこのけしあと (Blot of 3 letters) のデータは、シリコンを除く最も軽微で少ない量の元素を示した。(図 3. 図 4 参照)

一般に重い元素はインクを紙に浸すと早く沈み、重い元素の濃度は書いて始めにあらわれる。この性質はインクの量とページに書かれた化学性分の中味と関係するだろう。

このことから、Vo. 1, Vo. 2 の日付とサインの関係は密な類似を提出する。Vo. 3 の日付のデータをみると 4 つの元素の割合、Fe (鉄), Cu (銅), Zn (亜鉛), Bb (鉛) は Vo. 1, Vo. 2 に比べて反転している。これはマンガンに近い量である。このことはバッハが Vo. 3 の日付を書いた時、インクが流れ出し、再びインクをつけて書いたことを想定させる。マイクロフィルムで三つのサインと日付を調べた結果、Vo. 1, Vo. 2 は普通の濃度のインクを示す一方、Vo. 3 のサインは終りに向かってうすくなることを示



図 4. Vo. 1 バッハのサインと日付

す。Vo. 3 の日付のインクの濃度を比べると明らかに他の二つより重いインクである。

視覚観察とインク分析のデータから Vo. 3 の日付とサインの関係は、バッハがペンにインクを浸し、サインした後、日付を書いたことを裏書きする。これらの例から考えて、絶対量の比較はできない。むしろ元素の関係との割合についての比較を求める必要がある。これらのデータを比較し、その結果、統計上の分析を使用し、確率の分野による一致をひき出すことが行なわれなければならない。

b. 4 つのコメンツ

コックスはカロフ聖書の最初の論文は、トラウトマンによって提出されたと述べている。その提出した意図はバッハの敬虔で熱心な信仰の証明である。トラウトマンはその証明をバッハの 4 つのコメンツから見出したのである。

バッハ自筆

NB Erstes Vorspiel
auf 2 Chören
zur Ehre Gottes
zu musiciren.⁴

訳. 神の光栄のために演じられた最初の二つのクワイヤーの前奏。

この自筆はすべて赤インクによって出エジプト記 15.20 の注解文の左側余白に書かれたものである。Dr. シュルツ氏は、この手書きによるコメントはバッハのものであることはまちがいないとしている。それはコメントの最初の文字 Erstes の s が少し曲っていること、最後の文字 musiciren の終りスペルの n, また角度をもって長い一筆で書かれたウムラウトにバッハの筆跡を認めるのである。書込みの年代は 1740 年以降であると提言している。

コメントの冒頭にある NB, これは nata-bene の略(注意せよ)で、カロフ聖書に度々みられる。このコメントにもとづく聖句はミリアム

の賛歌と言われるもので、注解文にも「女子言者、アロンの妹ミリアム、彼女の手にはタンブリンがとられ、他のすべての女達も彼女の後から出て行ってタンブリンをもって踊った」と記されている。和訳では「女たちも皆タンブリンをとって、踊りながら、そのあとに従ってきた」とある。タンブリンをとって踊る。独語聖書では、mit Pauken im Reigenで、Paukenはタンブリンよりバスドラムと解釈した方がよい。また Reigenは raund dance 円舞である。

注解の文末にサムエル記（下）6.14 同 6.16 が付記されている。サムエル記（下）6.16 を引用すると「主の箱がダビデの町にはいった時、サウルの娘ミカエルは窓からながめ、ダビデ王の箱の前に踊るのを見て心のうちにダビデをさげすんだ」とある。

このミリアムの賛歌は、モーセに卒いられたイスラエル人がエジプトを脱出し、紅海の荒野を前にした時、エジプト王パロとその軍隊が押し寄せ、イスラエル人は窮地に陥るのであるが、神のわざによってエジプト軍は滅されてしまうのである。この時ミリアムの勝利の歌がうたわれたのである。旧約聖書で神を賛美した最初の記事である。

バッハは「……最初の二つのクワイヤー」と書いている。二つのクワイヤーとは一つはミリアムを、もう一つはミリアムの後から踊った女達を指すのであろう。バッハのモテット『主に向って歌え』（BWV 225, Singet dem Herrn）の二重合唱に、ここの聖句、mit Pauken im Reigenが挿入されている。二つのクワイヤーというバッハのコメントから、中世においてとくにパレストリーナ、ガブリエルのポリフォニーからバロック音楽へと続く多声音楽の流れをみることができる。そして中世のポリフォニーの原型は、グレゴリオ聖歌のアンティフォン（交踊）に辿ることができる。さらにその源は、紀元前 1300 年前の出エジプト記のこのミリアムの賛歌に至るのである。次の二つめのコメントを挙げる。

バッハ自筆

NB Dieses Capitel
ist das wahre Funda
ment aller gott
gefalliger kirchen Music. usw.⁶

訳. この章は、神を満足させるすべての教会音楽の基いである。

このコメントは歴代誌（上）25.1 の文頭の右側余白に書かれた。NB コメントは赤インクで、聖句にはブラックで細いアンダーラインがひかれてある。冒頭の NB, usw はバッハのスタイルをあらわし、NB はクラヴィーア練習曲 III にこれと同じものをみることができる。クラヴィーアとは鍵を意味するラテン語の (Clavis) から由来するが、バッハ（バロック時代）はクラヴィーアの練習曲 I~IV まで作曲し、III はオルガン用のためのもの（BWV 552, 669~689, 802~805）1739 年に出版されている。この聖句には「ダビデの軍と長たちはまたアサフ、ヘマンおよびエドトンの子らを勤めのために分かち、琴と立琴と、シンバルをもって予言する者にした。その勤めをした人々の数は次のとおりである。」25 章全体は、礼拝を司どる族、役目の決定について記されている。礼拝において歌うたう人々はアサフ、ヘマン、エドトンの三族で、24 班に分けられ、その務めはくじによって順番が定められている。一節は歌うたう氏族達の名前なのである。続く五節、六節には、「これらは皆、神がご自身の約束にしたがって高くされた王の先見者ヘマンの子たちであった。神はヘマンに男 14 人、女の子 3 人を与えられた。これらの者はその父の指揮の下にあって、主の宮でうたい、シンバルと立琴と琴をもって神の務めをした。アサフ、エドトンおよびヘマンは王の命の下にあった。」5 節の王の先見者は、名誉ある地位を与えられたことを意味する。音楽を司る者は一般のレビ人よりも重んじられたのである。

ここで登場するレビ人は祭司の勤めをもつ者で、モーセが主に命じられて幕屋で神との会見するところから、レビ記に入る。レビ記 1.9「祭

司アロンの子たちは祭壇の上に火を置き……」
とあるように礼拝を行なう時の細かな規則を守り行なう役目をもっていた。アロンの子、エレアザルはレビ人の先祖であり、アロンはモーセの兄である。

このように音楽の役目を与えられた者たちは皆、父から子へ、また子というように代々世襲によって決められていたのである。

さて、北ドイツのチューリングン地方にバッハ一族がある。アサフ、ヘマン、エドトンの一族の歌うたう務めをもつ者があるようにバッハ一族も代々音楽を職業とする家系なのである。C.P.E. バッハ (J.S. バッハの二男) は父セバステアンの生前一族の系図を書いていたことを J.N. フォルケルに書送った。バッハ祖先はハンガリーで粉屋を営んでいたが、ルター主義信仰を守るためのチューリングンに戻らなくてはならなかった。この粉屋のバッハはリュートを奏し、音楽家の始まりが起ったのである。粉屋の息子ヨハネス・バッハはゴータの町楽師となり、その息子クリストフ・バッハ (ヨハネスの二男) はヴァイマルの宮廷に仕えた。クリストフの次男アンブロジウス (セバステアンの父) はアイゼナッハの宮廷、及び町の楽師であった。バッハ一族、それは当時、音楽を職業とする者の意であった。

バッハ自筆の終りには教会音楽 (Kirchen Music) とある。バッハが 1708 年、6 月 25 日、ミュールハウゼンを去るにあたって書いた辞任の中に三回、教会音楽と書かれている。そこには「神の栄光のために乏しい能力のおよぶかぎり力を貸す」と書かれてある。

三つめのコメントは
バッハ自筆

NB Ein herr
lichen Bewiss
das neben anderen
Anstalten des Gottes
dienstes besonder
Auch die

Musica vom
gottes Geist durch
David mit ange
ordnet worden

訳. ダビデの精神によることのほか順序だてられた音楽は、礼拝の形式として申し分ない。

NB, コメントともブラックインクで書かれ、バッハのものであることはまちがいない。コメントは 21 節に続く注解文の右側余白に書かれている。注解文段落にはすべて「ㄥ」印がつけられている。歴代誌 (上) 28.21 節には「見よ、神の宮のすべての務めのためには祭司とレビびとの組がある。またもろもろの勤めのためにすべての仕事を喜んでする巧みな者が皆あなたと共にある。またつかさたちおよびすべての民もあなたの命じるところを行なうでしょう」とある。注解文の内容は、マタイ 15.9 が引用され、自己本位、わがままでうわべだけの神への礼拝のつとめをいましめている。歴代誌 (上) 23 章には、ダビデが神を礼拝するために組織し、各々の組に分けて役目を設けたことが記されている。「ダビデはイスラエルのすべてのつかさ、および祭司とレビ人を集めた」とある。4 節では、ダビデは「~44 人は門を守る者となり、また 44 人はさんびのためにわたしの作った楽器で主をたたえよ」とある。ダビデはいかに神を恐れ、礼拝を重要なものとしたかがわかる。またダビデは音楽することに充分心を傾けたのである。ダビデ自身歌をうたい、楽器をもって踊ったのである。「ダビデとイスラエルの王家は琴と立琴と手鼓と鈴とシンバルとをもって歌をうたい、力をきわめて主の前に踊った」(歴代誌 (上) 6.5)

4 つめのコメントは歴代誌 (下) 5.12~13 節に続く注解文右側に書かれた。

バッハ自筆

NB By andäch
Tigen music

ist allezeit gott
mit seiner gnaden
geganwart¹⁰

訳 献身的な音楽には常に神の恵みが与えられる。

バッハ自筆であることはまちがいないものである。コメントはブラックインクで書かれ、12節、13節には細いブラックインクでアンダーラインがひかれてある。また段落には赤で「ク」がつけられている。

13節「ラッパ吹く者とうたう者とは、ひとりのように声を合せて主をほめ、感謝した。そして、彼らにラッパとシンバルとその他の楽器をもって声をふりあげ、主をほめて、

『主は恵みあり、そのあわれみはとこしえに絶ゆることがない』

と言った時、霊はその宮すなわち主の宮に満ちた。」と注解文には、詩編 136.1 が付記されている。

「主に感謝せよ、主の恵みはふかくそのいつくしみはとこしえに絶えることがない」

歌い手、奏者は祭壇の東の口に立ち、すなわち西側の聖所に向かって立った。霊は神の栄光と顕現を象徴する。

以上、4つのコメントは旧約聖書の篇所であり、この4つがモーセから始まり、ダビデ、ソロモンと続く族長の中からとられたことは興味深い。

C. ライプツィヒ時代とコメント

トラウトマンの主張するバッハの敬虔で熱心な信仰について考える時、ライプツィヒ時代、晩年に迫る 1733 年にカロフ聖書を入手したこと、またライプツィヒ時代が言うまでもなくバッハにとって好ましからざる任地であったということ、それらのことをどのように関連づけたらよいのだろうか。

1723 年、ケーテンから移り住んで以来、度重なるトラブル、歩み寄ることのないまま続いた大学とライプツィヒ市との闘争。失意と失望を

もって生きていかななくてはならなかった任地、それがライプツィヒだった。エールトマン書簡、失意と失望を物語る旧友に宛てた手紙、それは新しい任地への委託でありバッハの胸中を忠実に示している。この時代の創作活動、とくに晩年の『平均律クラヴィーア曲集』(1742 年)、『音楽の捧げもの』『フーガの技法』(1749 年)、これらの作品は宗教曲、礼拝音楽とは言い難いのである。もちろんこの時期に作られた『ロ短調ミサ』『クリスマスオラトリオ』を忘れることはできない。しかし晩年に向って新しいオリジナルの作品は減り、パロディー形式による作品がより多くみられるようになる。教会カンタータに比べ世俗カンタータがその数においても上回るのである。

このようにバッハが生きたライプツィヒ時代の背景を考える時、カロフ聖書に書き込まれたコメントをどのように位置づけたらよいのだろうか。バッハはライプツィヒでの活動に興味をもっていなかったのだろうか。

カロフ聖書のいくつかのコメントの中から、バッハの胸中を示すと思われるものを次に挙げてみる。それはさながら希望と失望の間をさまよひ、葛藤しつつ苦悩しているようにさえ思える。

バッハ自筆

Gebeth

訳 祈り

この短い言葉は、旧約聖書、ミカ書 7.20 の注解文の終り、右側余白に書かれたものである。注解文 15 行段落右側にはすべて「ク」がつけられている。ミカ書 7.20 には「昔からわれわれ先祖たちに誓われたように、真実をヤコブに示し、いつくしみをアブラハムに示される」注解文には、予言者ミカを通して語られた聖句は、やがてキリストを通し、神の恵みを理解するに至ること。それは、救い主キリスト、神の子キリストによってこの世の悪魔の危険から逃れ、光の道を歩むことができる。アーメン。と述べられている。

バッハはただ祈りの必要さ、大切さを書きとめたのだろうか。あるいは祈らなければならない必要にせまられていたのだろうか。聖句にあるように、ヤコブに示し、アブラハムに示した約束をバッハもまた求めたのだろうか。ミカ書 20.7 には「しかし、わたしは主を迎え見、わが救いの神を待つ。わが神はわたしの願いを聞かれる。」と記されている。

バッハの所者していたカロフ聖書は、ウェテ
ンベルグで印刷されたが、多くの箇所
に誤字や脱字、あるいは欠落した部分
を残したまま出版されたが、それら
にバッハ自身が訂正、加筆を行なっ
ている。新約聖書マルコ 10.29~30
も他の箇所と同じように欠落した部
分を補っている

バッハ自筆

F Vatter und

⊕ oder Weib

um meinet willen

und um des Evangeli willen

V.30 Der nicht hunderfältig

empfahe itzt in diser zeit,

Häusser u, Brüder u, Sch

western u, Mütter u, kinder,

u, Acker // ———¹²

訳. 父, そして, また妻, わたしのため, ま
た福音のため, V. 30. 今この時代では
家, 兄弟, 姉妹, 母, 子, 畑は必ずその
百倍を受ける。

F, ⊕, #のマークは余白に書かれたと同じよ
うに原文聖句にも同じマークがつけられてい
る。主に, V. 30 の 30 節に相当する欠落部分
を補うためにこのコメントが書かれた。奇妙な
のは 29 節の□で囲んだ妻(Weib)と記されて
いる点である。聖書には母(Mutter)と印刷
されているが, バッハはまちがって妻と書
いたのだろうか。校正したバッハがいそ
いで書き込んでミスをしたのだろうか。あ
るいはバッハの時代,

妻と母は同義語の意味を表わしていたの
だろうか。30 節の文末には「来たるべき
世では永遠の生命を受ける」と記されて
いる。バッハはケーテン時代に亡くし
た最初の妻マリア・バルバラをこの聖
句の中に加えたかっかと考えるのは想
像の世界を越えているのだろうか。

旧約聖書, 詩編 128.4 節の聖句行間に

バッハ自筆

“trocknest”¹³

訳. 乾く

と書かれた文字をみつけだすことができる。
和訳では「主よ, どうか, われらの繁栄を,
ネゲブの川のように回復してください」と
あるが, ルター訳のドイツ語聖書では「全
き回転によって, 主よ, あなたがネゲブ
の川を返してください」¹⁴とある。この
聖句の内容は, バビロンから捕れた人とし
て過したイスラエル人が祖国に帰り, 国
の再建に燃え, 逆境にありながらも繁栄
と回復を祈り求めた詩である。注解文に
は士師記, 1.5 が付記されている。「アク
サは彼に言った。『わたしに贈り物をく
ださい。あなたはわたしをネゲブの地
へやられるのですから, 泉をもわたし
にください。』それでカレブは上の泉と
下の泉とを彼女に与えた。」

ネゲブはパレスチナの南部をさす。そこ
は乾草地帯であり, この地方の一年の大
部分の水がなく乾いている所である。し
かしこんな荒れはてた砂漠にも上の泉
と下の泉のある所があるのである。バッ
ハの書いた一語であるが, ライツィヒ
での彼の胸中を示すとも思われる。

次に, 書き込みではないが, ヨシュア記
1.5 節にアンダーラインと二つの NB を
みいだすことができる¹⁴。特に, 5 節の
後半部分にアンダーラインがひかれて
いる。NB はこの聖句の左側余白に, も
う一つは右側上段余白に書かれている。
アンダーラインが引かれた聖句は「わ
たしはあなたを見放すことも, 見捨てる
こともしな

い。」Dr. シュルツ氏は、この NB はバッハのクラヴィーア曲集 III に同じスタイルの型を見出すことができると述べ、年代はバッハ晩年のものと提言している¹⁵。右側上段余白に記された NB とアンダーラインは、注解文に付記されたヘブル人への手紙 13.5 節である。アンダーラインされた聖句は「主は、『わたしは、決してあなたを離れず、あなたを捨てない』』と記されている。ここのヨシュア記の記事は、イスラエル人を引きいて故郷カナンに向ったモーセが、途中モアブの地で死に、その際従者のヨシュアに主が語った言葉である。

いくつかバッハの書きつけたコメント、あるいはアンダーラインを挙げたが、これらのコメントから、バッハの信仰のもつ敬虔さ、あるいはライブツィヒでのバッハの内面の世界というものに触れる思いがする。バッハにとって聖書は神と対話する厳しゅうな場所であり、自らを赤裸々に告白し、また祈るところだったのではないだろうか。

バッハ生誕 300 年を記念してカロフ聖書の報告書がコックスによって出版された 1985 年、奇しくも、同じこの年に、『聖書解釈者としてのバッハ』“*Bach Als Ausleger der Bible*”¹⁶ と題する一冊の書物が出版された。この中の『バッハの作品についての神学と精神の可能性、特に J. アルント, L. フッターの言葉と精神からの理解と考察をもとに』、あるいは『神秘主義者としてのバッハ』¹⁷ はバッハと聖書、バッハの精神世界、またバッハの信仰について述べられている点で興味深いものがある。とくにその中で述べられているバッハと神秘主義について、中世から受けつがれたそれ（神秘主義）はバッハの時代までキリスト教の底流を一貫して流れ（ルター主義の中にも）それをバッハは切望し、それに引かれたとある。続いて、神との全き合一（ウニオ・ミスティカ）は A. カロフによってルター主義に順次受け入れるようになったと述べられている。バッハのカロフ聖書のコメントは

この点で神秘主義とどのような関わりをもっているのか興味ある課題でもある。カロフ聖書全 3 巻は 3000 ページを越える長大な書物である。バッハのコメント、多くのマーク、印をみるときにバッハが聖書にいかにか精通していたかに驚かされるのである。

- 注 1. Edited, by Howard H. Cox 『*The Calov Bible of J.S. Bach*』 UMI Reseach Press.
2. 同上. p. 3~11
3. 『Bach-Dokumente Band I』 p. 60.
4. 注 1 に同じ, Fac. 40 より
5. 同上. p. 13 *A Literary Analysis of the Intelligible Entries from the Total Sample* より
6. 注 1, Fac. 110
7. 注 3 に同じ, p. 255. *Ursprung der musicalisch-Bachischen Familie*.
8. K. ガイリンガー著, 『バッハ』角倉一朗訳, 白水社 p. 47
9. 注 1 に同じ, Fac. 111
10. 同上, Fac. 112.
11. 同上, Fac. 205.
12. 同上, Fac. 233.
13. 同上, Fac. 135.
14. Fac. 88.
15. 注 1 に同じ
16. Martin Petzoldt, *Bach Als Ausleger der Bible* 1985. Evangelische Verlagsanstalt Berlin.
17. Jorg Herchet und Jorg Mibradt, *Bach als Mystiker*

参 考 文 献

- 浅野順一著『旧約聖書を語る』日本放送出版教会。
- 日本基督教団出版『旧約聖書略解』。
- 日本聖書協会『聖書』。
- F・ドリアン著, 藤本黎時, 福田昌作共訳『演奏の歴史』音楽の友社。
- Die Bibel (*Neu bearbeitete Lutherubersetzung*)